

# 面 隠岐国分寺 蓮華会舞

独特の舞楽と仮面で有名な隠岐蓮華会舞。この舞は、奈良時代以来、宮廷で行われるようになった宮廷舞楽の流れをくんでおり、平安のころ隠岐に伝えられたようです。古代の宗教儀式の様子を色濃く残していると言われ、その起源としてインド、中国、朝鮮半島と広くアジア各地の舞踊が考えられています。使用される面や衣装もエキゾチックな雰囲気が漂い、国際色が豊かです。

舞台は、二人の子供が菩薩の面をつけて眠りだす「眠り仏」で幕を開け、頭に角を持つ「獅子」、少年の剣舞「太平楽」、素朴な農作業のしぐさがユ・モラスな「麦焼き」、昇龍の面を付け飛び上がった滑稽にふるまう「竜王」、田楽風の「山神貴徳」と続き、優美な衣装で静かに舞う「仏舞」で幕を閉じます。これら7種目の舞は、地元の小学生から老人によって、2時間あまり演じられます。

現在伝わっている古面は平安時代から鎌倉、桃山期のもので、1974年には県の有形民俗文化財の指定を受けています。舞自体も1977年に重要無形民俗文化財として国の指定を受け、地元舞保持者会の人たちによって伝えられています。現在は、西郷町・隠岐国分寺境内に造られた舞台上、毎年、桜咲く4月21日に7種類の舞が、雅楽の奏でられる中で舞われています。



眠り仏

「唐美人」と言われる、ちょっとしもぶくれの菩薩の面。最初の舞である「眠り仏」で使われ、その名のとおり、まぶたを閉じ、薄く眼を開いた様子が表現されています。



麦焼き

「還城楽の翁面」とも呼ばれます。豊かな表情と深く刻まれたしわが特徴的。



竜王舞



竜王

大きく開いた目元、大きな鼻が異様な風貌をかもし出しています。頭上には竜を乗せていて、舞楽面である「蘭陵王」を模したもののようです。



仏舞い

日本人的な丸顔をした一對の面。髪の毛の結い方に違いがあり、一組の男女を表現しているようにも見えます。